

50歳を過ぎて、“僕”という年齢ではないと思うものの、“私”という柄ではなく、“僕”という言葉を使って書こうと思う。佐久病院に就職して24年間、来る日も来る日も暗い手術室で過ごしてきた僕には、週1回の川上診療所へのドライブは清々しく、特に初夏の南佐久は格別だった。春セミがうるさいほど千曲川の源流に響き渡っている中、川上診療所に1時間以上かけて到着した。まだ伊藤先生が来ていない暗い医局に荷物を置いて、内視鏡室に直行する。

「先生、おはようございます」と若い看護師さんに元気にあいさつされる。少しどぎまぎしながら、「あ、どうも」とあいさつを交わす。すでに患者さんがベッドに横になっている。内視鏡を持って、検査を始める。

「上手いですねえ、そんな感じに楽しんでいます」と患者さんに声を掛ける。そうこうしているうちに検査終了。「問題ないですよ。良かったですね」と声をかけて、所見をカルテに打ち込む。少し、次の患者さんまでに時間が空いたので、看護師さんに「伊藤先生はどんな感じ？」と聞く。

「え～、とても紳士的で大人って感じで、他の先生と比べて落ち着いている感じです。」このままだと今後、鬱憤が溜まってしまうので、つい言ってしまった。

「伊藤先生はね、フェイクだよ。真逆だよ。」

「え～、信じられないです。人は見かけによらないんですね。」

僕は敢えて多くは言わず、「残念だけど……」と小さい声で俯き加減に頷いた。今日の最大の目的が達成できたという充実感に浸りながら、春セミが降り注ぐ川上診療所を後に、小海診療所へと車を走らせた。

